

史跡岡山城跡本丸下の段 発掘調査現地説明会資料

岡山市教育委員会

日時：平成 23 年 12 月 3 日(土) 13:30~15:00

場所：岡山市北区丸の内 2 丁目(史跡岡山城)

《はじめに》

岡山市教育委員会では、史跡岡山城跡の保存整備事業の一環として、平成 23 年 11 月から本丸下の段(テニスコート跡地)の発掘調査を行っています。本年度は、平成 21 年に南部分が確認された中門(長屋門)の北側部分の構造を明らかにすることを目的に調査を進めています。調査面積は 100 m²です。調査も終盤に差し掛かり、発見された遺構や遺物を公開する運びとなりました。

《調査で明らかになったこと》

○これまでの発掘では

平成 21 年(2009 年)の調査で、中門の遺構は、南側の建物基礎の石組み基礎や中央部の出入口をはじめ、周囲に雨落ち溝や排水溝、厠、集水枡などをともなっていたことが分かっています。

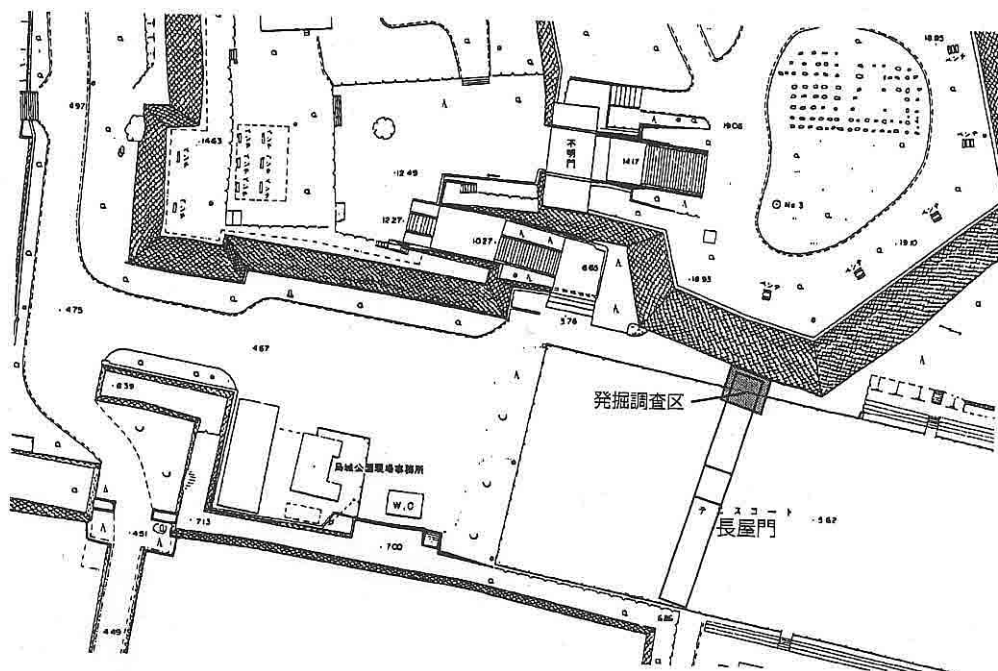


図1 2011年度調査区位置図

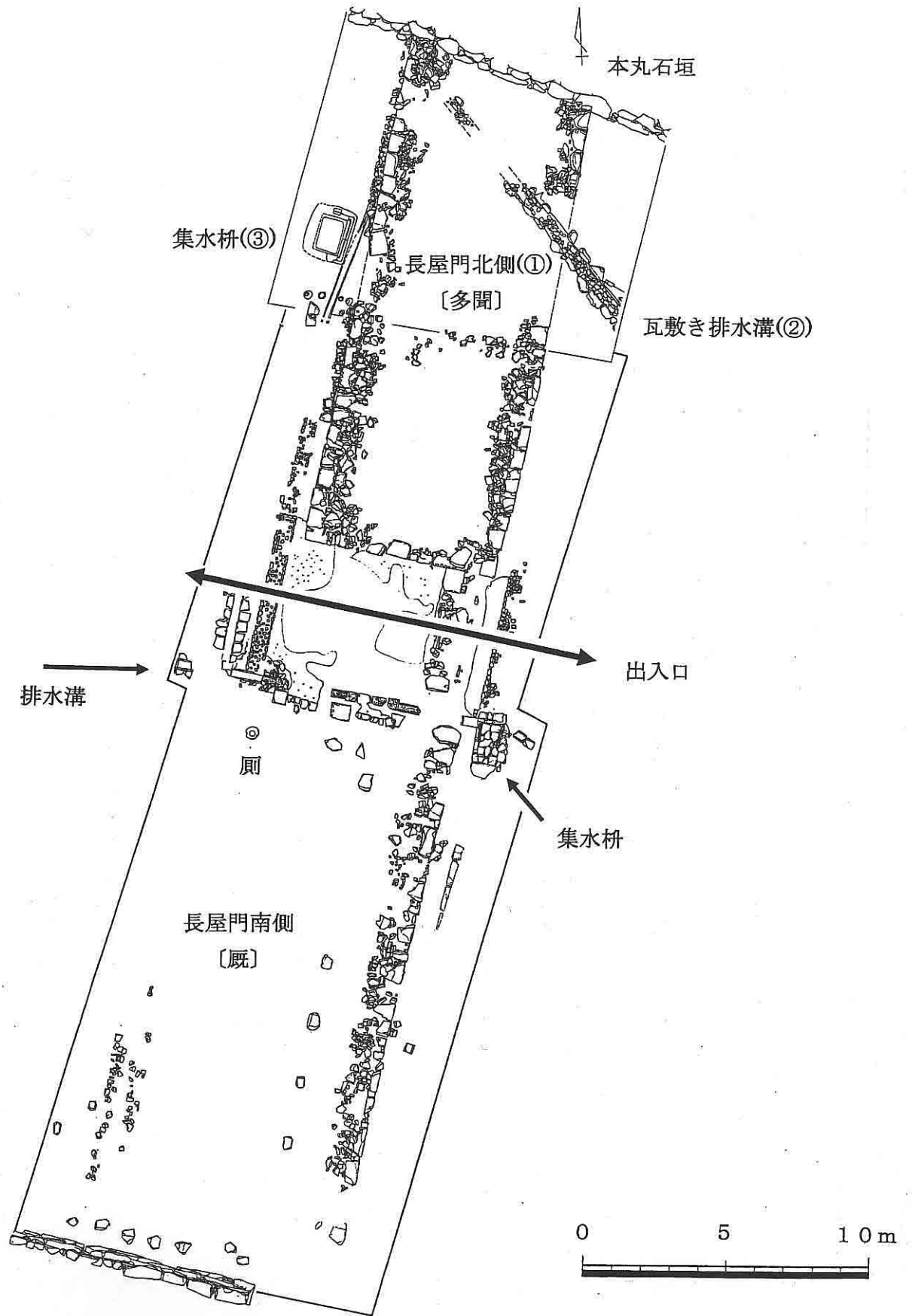


図2 中門(長屋門)平面図 S = 1 / 200

○本年度の成果の概要

遺構について

今回の調査では主に、北側の建物基礎となる石組み列(①)、その下から見つかった瓦敷きの排水溝(②)、中門の北西側に門に沿うように設置された集水枡(③)などの遺構が確認されました。そして、②の溝がこの調査で一番古い遺構です。順を追って説明していきたいと思います。

① 石組み列

中門の出入口を起点に北に伸びる形で検出されました。前回の南側部分の石組みと合わせて考えると、中門の規模は、南北方向に42～43.5m、東西方向に7mであったと思われます。課題であった本丸石垣とのとりつきも、残存の状況は良好でした。石組みは背後に裏込石を充填して、堅牢に築かれていることがうかがえます。

② 瓦敷きの排水溝

中門よりも下層にある溝です。両側に比較的大きめの石を使用し、底には隙間なく瓦が敷かれていました。中門の基礎下で一部が確認され、延長した先は石垣にさしあたることから、本丸石垣にともなう排水のための溝だと判断されます。

本来は、雨水などによる石垣の崩壊を防ぐ目的の施設であったものが、埋められて機能を失い、その上に中門が建てられたのでしょう。溝に敷かれている瓦は古めであり、出土した遺物などからも、江戸時代前期(17世紀)の初めから前半の年代観が与えられます。

③ 集水枡

2.0×1.5mの規模をはかり、内側四方の壁面と底部は、水漏れを防ぐため漆喰で塗り固められています。上部には、豊島石で組み合わせ式の石枠が置かれており、深さはおよそ1mほどです。

江戸時代元禄期の『御城内御絵図』(1700年)では、この遺構の存在する箇所丸く桶のようなものが描かれていますが、調査してみると、このような枡が設置されていました。水をためておくための場所であったことは確かですが、絵図とは異なる状況が見出せ興味深いです。

使われている石材や漆喰の特徴、また絵図の建物配置を考えると、この枡は中門と同じ時期、あるいはそれに遅れる時期のものだと推測されます。

○出土遺構に関して

目的としていた中門と本丸石垣との関係の他、今回の調査では門の周囲や下層の枅や溝といった絵図では知ることのできない遺構が発見されました。これらは、岡山城の歴史の変遷を考える上で、意義深い歴史資料と捉えることができるでしょう。

遺物

調査区を発掘中に陶磁器、土器、瓦、動物の骨、貝などが出土しています。また、一部で旧制中学に伴う近代の遺物(三角定規や制服のボタンなど)もみられました。

1573年(天正1年)	宇喜多直家入城
↓ ↓	
1590・1591年(天正18・19年) ～1591年(慶長2年)	宇喜多秀家による城の大改修
↓ ↓	
1600年(慶長5年)	小早川秀秋入城
↓ ↓	
1603年(慶長8年)	備前が池田氏に与えられる
↓ ↓	
1615年(元和1年)	池田忠雄入城
↓ ↓	
1700年(元禄13年)	『御城内御絵図』が作成される 後楽園完成(約136,000㎡)
↓ ↓	
1873年(明治6年)	廃城令が出される
↓ ↓	
1896年(明治29年)	旧制中学校が創建
↓ ↓	
1945年(昭和20年)	空襲により焼出
↓ ↓	
1964～1966年(昭和39～41年)	天守が再建される

岡山城に関連するできごと